

とを確認する。

備考⁽⁶⁾ 試験体の含浸面の変化としては、原状試験体の試験面と比較して、「光沢が現れる」、「変色する」などがあり、変化の無い場合は、「含浸による外観変化がない」とする。

備考⁽⁷⁾ 3個の試験体において、外観観察結果に差異がある場合には、その違いを報告する。

6.2 含浸深さ試験 シラン系表面含浸材の含浸深さ試験方法は、次による。

6.2.1 使用する装置、器具 含浸深さを測定する器具として、JIS B 7507に規定する0.1mmまで測定できるノギスを用いる。

6.2.2 試験方法

図3に示すように、試験体の含浸面を2分割するように、試験体を割裂して、次の手順で、シラン系表面含浸材の含浸深さを求める。2分割した試験体を、1分間水に浸せきして取り出し、割裂した面のはっ水している部分の厚さをシラン系表面含浸材の含浸深さとして測定する。含浸深さの測定位置は、図4に示すように、試験体の割裂した面の中心、およびその中心から25mmの位置の片面3箇所とし、対面する割裂面で合計6箇所の含浸深さをノギスで0.1mmの単位で測定し、その平均値を算出して、JIS Z 8401によって、小数点以下1けたの値に丸めて、1試験体の含浸深さとする。含浸深さは、3個の試験体の平均値で示す。

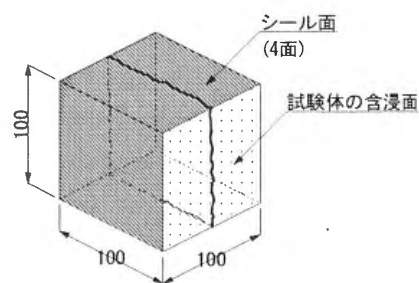
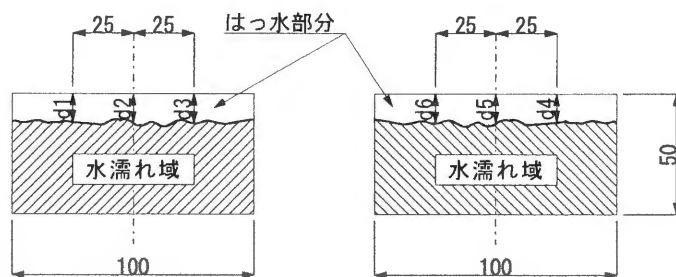


図3 試験体の割裂状況(単位:mm)



$$\text{含浸深さ} = (d1 + d2 + d3 + d4 + d5 + d6) \div 6$$

図4 含浸深さの測定位置(単位:mm)

備考⁽⁸⁾ 試験体の浸せきに用いる水は上水道水とする。

備考⁽⁹⁾ 試験用基板がコンクリート基板の場合で、含浸深さを測定する位置に粗骨材、粗骨材の抜けた空隙または大きな空隙が存在する場合には、JIS A 1152の5.2 (中性化深さの測定) の測定位置に粗骨材の粒子がある場合、またはあった場合の測定方法に準じて、含浸深さを測定する。

6.3 透水量試験 透水量試験方法は、次による。

6.3.1 使用する装置、器具

- メスピペット 感量(1目盛り)0.05ml, 容量5mlのものとする。
- 漏斗 口径75mmのガラスまたはプラスチック製のものとする。
- ゴム管または塩化ビニル管 試験用器具のメスピペットと漏斗を接合するために使用するものであり、接合の際に漏水のないものとする。
- シーリング材 シリコンシーリング材などの水漏れの生じないもの

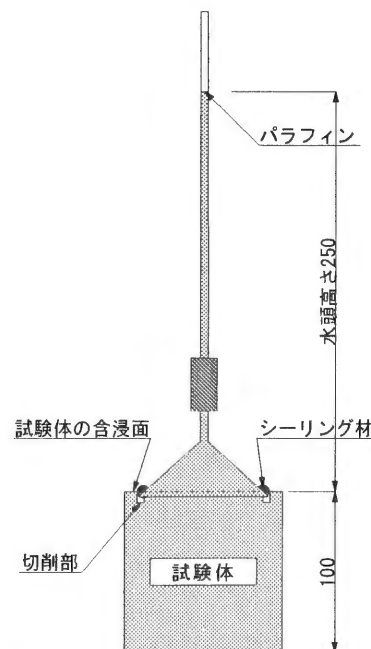


図5 透水量試験方法(単位:mm)

とする。

- e) 試験水 JIS K 0557の種別A 2に適合する水とする。

6.3.2 試験方法

- a) JIS A 6909の7.13 (透水試験B法) に準じて、図5に示すように、試験体の含浸面および原状試験体の試験面に透水試験器具を止め付けて、透水量試験を行う。なお、試験水が蒸発しないように、パラフィン等をたらして試験する。
- b) 試験開始時から7日後の水頭の高さ (W_{pi}) を読み取り、試験前の高さ (W_{p0}) との差から、次式によって透水量を算出し、JIS Z 8401によって、小数点以下1けたの値に丸める。透水量は、3個の試験体の平均値で示す。また、試験体および原状試験体の透水量から、透水比を算出し、JIS Z 8401によって、整数に丸めて示す。

$$W_p = W_{p0} - W_{pi}$$

ここに、 W_p : 透水量(ml)

W_{p0} : 試験開始時のメスピペットの読み(ml)

W_{pi} : 試験開始時から7日後のメスピペットの読み(ml)

$$\text{透水比(\%)} = \frac{\text{試験体の透水量}}{\text{原状試験体の透水量}} \times 100$$

備考⁽¹⁰⁾ 試験体からの漏水を防止するために、試験体に溝を切削してシーリング材を充填し、シーリング材が硬化する前に漏斗を取り付けるとよい。

備考⁽¹¹⁾ 試験期間中は、定期的に水頭を観察し、透水量が多く水頭の高さが目盛りで読み取れない場合には、メスピペットを用いて試験水を継ぎ足し、その量を透水量として加算する。

6.4 吸水率試験 吸水率試験方法は、次による。

6.4.1 使用する装置、器具

- a) 試験用容器 ポリエチレン製またはポリプロピレン製のものとし、吸水率試験時に、130mmの水深が確保できる大きさとする。なお、容器は、あらかじめ十分に洗浄しておく。
- b) はかり 精度0.1gを有するものとする。
- c) 試験水 JIS K 0557の種別A 2に適合する水とする。

6.4.2 試験方法

- a) 試験体および原状試験体の質量 (W_{s0}) を0.1gまで測定する。
- b) 図6に示すように、試験体の含浸面および原状試験体の試験面が側面になるようにして、試験体の上面が水面下20mmになるように、温度 $23 \pm 2^\circ\text{C}$ の水中に浸せきする。その際、試験体の下面が試験用容器底面から10mm程度になるようにスペーサーを設置し、隣接試験体との間隔は30mm以上となるようにして浸せきする。なお、試験体および原状試験体の吸水率試験は、それぞれ、別の試験用容器を用いて行う。

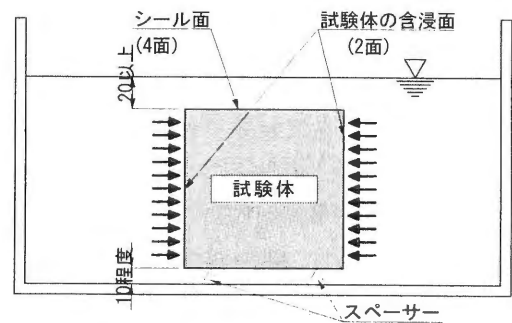


図6 吸水率試験方法 (単位:mm)

- c) 試験開始時から7日後に、試験用容器から試験体を取り出し、湿布を用いて表面の水分を除去した後、質量 (W_{sj}) を0.1gまで測定して、次式によって吸水率 (W_s) を算出し、JIS Z 8401によって、小数点以下1けたの値に丸める。吸水率は、3個の試験体の平均値で示す。また、試験体および原状試験体の吸水率から、吸水比を算出し、JIS Z 8401によって、整数に丸めて示す。